

## 気分状態と情報処理方略(2) - SACモデルの改訂 -

### Mood States and Information Processing Strategies(2): The Revision of the SAC Model

北村 英哉(東洋大学)

Hideya KITAMURA

田中 知恵(昭和女子大学)

Tomoe TANAKA

近年、感情と認知の相互作用的影響に関わる研究が増加している(Bless & Forgas, 2001; Forgas, 2000, 2001, 2006; Eich et al., 2000; Martin & Clore, 2001)。認知のあり方によって、感情の生起が異なってくるという認知的評価モデル(Lazarus, 1991; Roseman, 1984; Smith et al., 2006; Smith & Kirby, 2000)やREBTや認知行動療法の考え方も認知の変容が抑うつや不安などの感情に対して影響があることを強調している(Ellis & Dryden, 1996; 坂野, 1995; 下山, 2007; 丹野・坂本, 2001)。逆に、認知者の感情状態によって、記憶や判断に影響が及ぶとする気分一致効果(Bower, 1981; Isen et al., 1978)や気分状態によって、認知的な処理スタイルが変動するといった情報処理方略の問題(Schwarz, 1990)など、感情が認知にもたらす影響過程についても研究が盛んに行われている。

本稿は中でも、情報処理方略の問題を取り上げ、気分状態と情報処理方略についてさまざまに提案されているモデルを検討し、これらを統合的に説明するモデルとしてSACモデルを提案し、初期のSACモデルをより精緻にした改訂SACモデルを提示する。

#### 1. 気分の定義

まず、最初に気分の定義を行う。感情を「情動(emotion)」と「気分(mood)」の2つに分け、感情(affect)の語はその上位概念としての総称とする(Forgas, 2000; 北村・木村, 2006)。「情動」は、強度が強く、より短期的な感情であり、その感情が向けられる対象や原因が比較的明確であるものを言う。強い怒りや悲しみは、何に対して怒りを感じているのか、何に対して悲しみを感じるのかある程度説明可能である。驚き、恐怖、強い嫌悪、強い喜びなど、個人が置かれたある状況に対して、その感情的反応として情動は生じる。強度が高いため、長い持続に生体が耐えられず、ある程度期間が経つと減じていくことがよく見られる。長く続く場合も、再三、その原因状況を考えたり、想起したりすることが引き金となって情動の生起が繰り返し、更新されて生じていくものと捉えることができる。

それに対して、本論文が取り扱っている「気分」は、強度が弱く、やや持続的な感情であり、日常的になんとなく気分がよいとか、気分が悪いとかいったような背景感情を表す。したがって、情動では、怒り、恐怖など明確に情動の種類が分けられるが、気分においては、主としてポジティブ

な気分とネガティブな気分という2極の感情価に分けることが多い。ただ、ネガティブな気分については、それが悲しみ、抑うつ的にネガティブなのか、不満や不快としてのネガティブなのか、区分を行おうとすれば分けることができる。同様に、ポジティブ気分についても、何となく気分がよくてうきうきしている、楽しいという場合と、リラックスして充足感があり落ち着いた幸福感という2つに分けることができる。この分類は、いずれも喚起の程度にかかわっており、気分という相対的に喚起レベルの低い感情にあっても、表1のように、その中でさらなる喚起レベルの幾分かの違いによって、感情の種類が異なってくることを表すものである。

表1 気分の感情価と喚起レベルによる分類

喚起高		喚起低
ポジティブ	楽しい、嬉しい	リラックス、充足感
ネガティブ	不快、不満	悲しみ、軽い抑うつ

気分と認知の研究における感情操作では、ポジティブ気分の場合は多く楽しさを喚起している。コメディやアニメのビデオを視聴させたり、コミックを読ませたり、アップテンポの楽しい音楽を聴かせたりする人が多い。それに対して、ネガティブ気分の喚起では悲しみの場合の方が多く、悲しみを誘発するビデオを視聴させたり、憂鬱な調子の音楽を聴かせたりする。不快な感情を喚起させる場合もあるが(北村,2002) 特段両者は区別されておらず、認知に対する効果についても異なった点は見出されていない。本稿においても、もっぱらポジティブ気分とネガティブ気分を取り上げて、とりたててその気分の中身の違いについては言及しないが、今後もっと区別をすべきだという論議がある(高橋,2002)。

## 2. 気分状態が認知に及ぼす影響 - 処理方略の登場前夜

弱い気分状態が認知に及ぼす影響として注意をしなければならないのは、強度が弱いために、認知処理を妨害するわけではないということである。記憶を検討する場合では、ストレス強度が強いと、全体的な記憶を弱めたり、抑鬱や不安が慢性的に強いと思考が十分働かなかったり、感情の認知的価値が減じられてしまう(Schwarz,1990; Clore et al.,2001)。このように、感情が生起しているために、認知処理が妨害されるという現象はここでは除かれる。認知処理が問題なくできる程度の背景感情として、なんとなく気分がよい状態や気分が悪い状態を扱っているのだということを確認しておく。認知処理が問題なくできるというのは可能態であって、だから常に十分な認知的処理を認知者が実際に行うかどうかは、次節以降に展開されるように論理的には別の事象となる。

さて、初期に気分状態が認知に及ぼす影響として取り上げられたのは、気分一致記憶効果である。主に、Bower(1981,1991)の感情ネットワークモデルに基づいて、ポジティブ気分のときに、ポジティブな材料の記憶が促進され、ネガティブ気分のときには、ネガティブな材料の記憶が促進されることが示された。この気分一致記憶効果の現象はほどなく、ポジティブ気分では効果は頑健であるが、ネガティブ気分時の効果が不安定であるというPNA(ポジティブ-ネガティブ非対称)現象として認識されるようになった(Isen, 1987)。ポジティブ気分とネガティブ気分で効果が変動することを説明する中で、気分と情報処理方略との対応が気づかれるようになってきたのである。

さらに、とりわけ社会的認知研究の領域では、社会的判断に及ぼす気分の影響が検討されることが多くなり、ポジティブ気分時に肯定的で好意的な評価、ネガティブ気分時に否定的で非好意的な評価が与えられやすいという気分一致判断効果が観察されるようになった。これは、記憶効果ほどではないが、やはりポジティブ気分の及ぼす効果の方がいくぶん強く、基本的に人がデフォルトでは肯定的な評価を生成しがちであることが仮定されている。したがって、判断課題において、ポジティブ気分群とネガティブ気分群の差を検討すると明確な違いが現れるが、統制群を加えて差を検討すると、ポジティブ気分群と統制群の違いの方がより明瞭であったりする。

### 3. 気分状態と情報処理方略

#### 3-1 感情改善について

ポジティブ気分時とネガティブ気分時で気分一致記憶効果が異なるというPNA現象は感情改善動機の働きによって説明できるとされた(Clark & Isen, 1982)。ポジティブ気分時には気分を保とうとする感情維持動機が働くが、ネガティブ気分時には、感情をポジティブなものに変えようとする感情改善動機が働く。したがって、ポジティブ気分時には、ポジティブなことを想起することが感情維持につながって適合しているが、ネガティブ気分時にネガティブな事象を想起することは望まれず、むしろ、時にポジティブな事象を想起することで(気分不一致効果)感情改善を図るというわけである。これがネガティブ気分時には気分一致記憶効果が安定して現れないPNA現象の元になっていると説明される。

さらに、Wegenerら(Wegener & Petty, 1994; Wegener et al., 1995)の快楽随伴モデルにしたがえば、人は快適な状態であることを望み、常にポジティブな状態を目指すために、そのために行う認知的な振る舞いが異なってくるとの指摘がなされている。たとえば、課題に取り組むことがそれほど楽しいことと考えられず、また、それほど不快でもなく、ニュートラルかあるいは、いくぶんつまらない課題であった場合を考えてみる。たとえば、学費値上げについての説得的メッセージや環境汚染問題についての説得的メッセージを読んで評価したりすることや、少し煩雑なパズルをといたり、丁寧に分析的に行わなければならない知的な課題(ただし単調な)に取り組むような場合である。

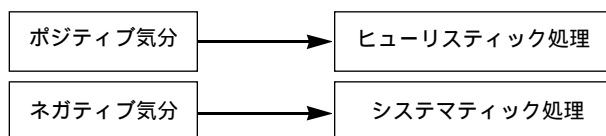
すると、ポジティブ気分群は、課題遂行に魅力を感じず、課題に一生懸命取り組むことは、自分の気分状態を低下させることに思える。そうした場合には、課題に熱心に取り組むことを回避するかもしれない。それに対して、ネガティブ気分群は、もともとネガティブな気分状態にいたので、それほど魅力的な課題ではなくても、課題に取り組むことは気晴らしや気散じになり、感情改善には有効である。そうすると、ネガティブ気分群の方が総じて、課題遂行の成績がよいことになる。これによって、ポジティブ気分群は、よりおおまかなヒューリスティック処理がなされているように観察され、ネガティブ気分群の方が、分析的、体系的な処理に従事しているように観察されるのである。

しかし、Erber & Erber(2001)は、人が常に気分を改善あるいは維持しようとはしていないことを複数の精緻な実験によって示した(Erber & Erber, 2001; Erber & Tesser, 1992; Erber & Therriault, 1994; Erber et al., 1996; 北村, 2003)。ポジティブ気分の者が悲しい新聞記事を読もうとしたりして、気分の中立化を図る(クールネス効果)。したがって、ポジティブ気分の実験参加者が常に、課題から逃避するとは限らない。快適な感情を常に人は目指しているという議論は、十分に現象を説明できない点がある。

### 3 - 2 処理資源の問題について

気分と情報処理方略の関係についての指摘の多くは、ポジティブ気分時に、ヒューリスティック処理、ネガティブ気分時にシステマティック処理がなされるという主張である(図1)。

図1 気分状態と情報処理方略



ここで述べられるヒューリスティック処理は通常、認知的な課題解決で扱われているヒューリスティックスよりも広げられた概念であり、判断などの際に、与えられた情報を十分考慮しないで、直観的に下される判断の仕方全般を指し示して用いられている(北村,2002,2005)。判断や回答を得る仕方として、簡易的な処理や直観的な処理に依存するといったことである。ポジティブ気分時に、おおまかなヒューリスティック処理がなされる原因として、認知容量説が提起されたことがあった(Mackie & Worth,1989,1991;Worth & Mackie,1987)。

ポジティブな材料の方が記憶ネットワークの中で多量なので、ポジティブ気分に基づく活性化拡散の方が広い活性化を生じて認知容量(処理資源)を奪い、そのためにヒューリスティック処理しかできなくなるといった説明がなされた。ネガティブな材料の方が少ないため、処理資源の消費が少ないので、認知的な能力の問題として、ネガティブ気分時の方が分析的処理をしやすいということであった。

この提案は、Blessら(Bless et al., 1996)の実験によって否定され、現在では強く主張されていない。

### 3 - 3 認知的チューニング説

Schwarz(1990)は、進化的な動機づけによって気分の及ぼす認知的振る舞いへの効果を説明した。彼は、気分の果たす役割として、生体に環境情報を告げ知らせるシグナルとして働くことを強調した(Frijda,1988;戸田,1992なども参照)。もともと情動においては、環境の危険のシグナルとして恐怖や嫌悪などがあって、生体にとって適応的な機能を果たしている(北村・木村,2006;戸田,1992)。強度の弱い感情である気分についてもそのような適応的機能が見られるのだと考えられた。ポジティブ気分は、環境が安全であることのシグナルであり、そのため、生体はおおざっぱで簡易的な処理で問題を処理しようとする。それに対して、ネガティブ気分は環境が問題をはらんでいることを知らせるシグナルなので、生体は問題に対処しようとして、よりシステマティックな処理方略を用いることになる主張された(Schwarz, 1990)。

ポジティブ気分時にヒューリスティック処理、ネガティブ気分時にシステマティック処理がとられやすくなる点についての実験的証拠はかなり収集されたが(Bless et al., 1990,1992; Bodenhausen et al., 1994; Forgas, 1998;北村,2002) その機序の説明は一致しているわけではない。

### 3 - 4 既有知識の役割

ポジティブ気分時にヒューリスティック処理、ネガティブ気分時にシステマティック処理がとられやすいということ自体は一致しても、たとえばBless(2000,2001)は既有知識への依存を重視する異なった説明を提示している。ポジティブ気分時に、環境が安全であるから熟慮的处理をなそうとする動機づけが減退して、ヒューリスティック処理がとられるという説明にBless(2000,2001)は反対する。ポジティブ気分時においても十分精緻な処理が行われ得ることを彼は実験によって示し(Bless et al., 1996)、これは動機づけとは関連しない習慣的な結びつきであるとした。ポジティブ気分は、環境が安全であるから「いつも行っとうまくいっている」デフォルトの処理を行うとよいということで、Bless(2000, 2001)のいう一般知識構造(General Knowledge Structure)に依存した処理を人はとりやすいのだという。その結果、人は、既有知識、スキーマやステレオタイプ、スクリプトに基づいた処理を行うことになり、これが、ヒューリスティック処理とされている処理方略を導くということである。

ただ、「いつもうまくいっている処理を習慣的に採用する」というこの説明は、Isenらが提示しているポジティブ気分時に創造的問題解決が優れるなどといったポジティブ気分と創造性、拡散的思考とのつながりについて説明を提供し得ない難点がある(Isen, 1990; Isen, et al., 1987; 沼崎他, 1993)。創造的問題解決をなすのに、既有知識のスキーマやステレオタイプに依存しやすいといった説明は矛盾することになる。ポジティブ気分時に独自の新しいアイデアが産出されやすいことも示されている(沼崎他, 1993)。

Bless説と近い説であるが、Fiedler(2001)が唱えるのは、ポジティブ気分時に同化的処理、ネガティブ気分時に調節的处理がなされるという主張である。同化的処理では環境側のデータ情報を既有知識に合致させていくために、既存のスキーマやステレオタイプが大きな役割を果たし、調節的处理では、環境データに依存したより詳細な処理がなされるという。Fiedler説もポジティブ気分時での既有知識の役割を重んじており、やはり創造性課題などとの整合性に問題がある。

### 3 - 5 感情入力説

これまでの説は、説明機序は異なるものの、ポジティブ気分時に、ヒューリスティック処理、ネガティブ気分時にシステマティック処理がとられるということ自体は一致していた。Martinら(Martin et al., 1993; Martin & Stoner, 1996)は、この気分と処理方略の一対一図式そのものに異を唱えた。

認知者にとって気分状態がどのような意味を示すシグナルとなるのか、Martinらは状況の影響を受けると主張した。同じポジティブ気分でも、課題遂行において、「楽しい限り課題を続ける」という状況と、「もう十分だと思ったら課題を終了する」という状況では影響が異なってくる。すなわち、「楽しい限り課題を続ける」場合は、ポジティブ気分群はネガティブ気分群よりも楽しい気分であり続ける時間が長いために、課題に長く取り組むことになる。それに対して、「もう十分だと思ったら課題を終了する」という場合では、ポジティブ気分群は、ネガティブ気分群よりも早く「十分だ」と感じやすくなるために、より早く課題を終了し、つまり、課題を長く続けない。

このような場合では、同じ課題に取り組むにしても、教示次第で、気分の示すところの意味を変えてしまうと、ポジティブ気分の者が課題を長く続けたり、短くやめたり、振る舞いが変わってしまうわけである。ただ、取り組み時間が長いにしても、短いにしても取り組む仕方の中身が分析的、体系的な処理がなされているのかどうかという点は確認しなければならない点である。

#### 4．SACモデル

ところで、対置させる2つの処理は、ヒューリスティック処理とシステムティック処理として取り上げられることが多い。しかし、このような名称、概念にも問題がある。ヒューリスティックというのは、問題解決における簡便的な発見法であり、説得的コミュニケーションを熟慮しなかったり、帰属的な分析が荒かったりするようなことを本来指し示すものではない(北村,2002)。問題の中心は、自動的な出力を修正したりしないで、そのまま用いてしまうようないくぶん衝動的な処理方略と、自動的な出力に対して統制をかけて適切な出力へと調整を図るような処理の2つだと考えられる。そこで、北村ら（北村他,1995;北村,2002）は、自動的処理と統制的処理の2区分を提案した。しかしながら、二過程モデルに含まれるようなこの区分では、2者択一的な狭い処理方略のレパートリーを示しているように見えてしまう。

自動的な過程についても、Bargh(1994,1996)の指摘する無自覚性、無意図性、効率性、統制不可能性という全ての要件を満たす完全な自動性を構成することは非常に難しいため、それぞれが部分的に、また程度をもって達成されるものとして、中間的な性質を持つ処理形態を含めて、自動的-統制的処理の連続体を考えることができる。

Fiske & Neuberg(1990)の印象形成の二過程モデルも、カテゴリーに基づく印象形成から、個別情報の断片的情報に基づく印象形成まで連続体で考えるようなモデルとなっている。

また、脳神経生理的な観点から考えても、感情的な情報を素早く感知して対処することに貢献するような速い処理ルートと、高次過程を経て調整を行うようなゆっくりしたルートが存在し、それ

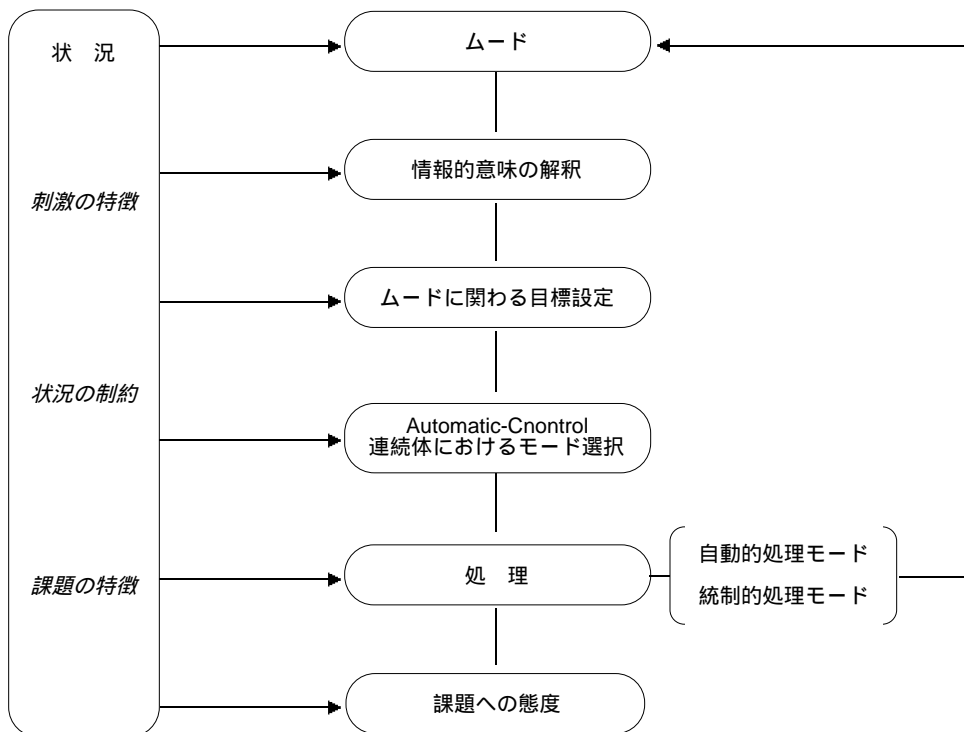


図2 改訂版SACモデル

は1か0かのように働くというよりも、各々のルートがどの程度働いているかの程度問題となる(LeDoux, 1996; Winkielman & Cacioppo, 2006)。二過程的に感情の自動性を考えていくことに対する批判も見られる(Barrett et al., 2007)。

そこで、モデルとして、自動的処理モードから統制的処理モードへ緩やかに変化し得るような連続体を想定し、いかほどかが自動的処理といった処理プロセスを考えることにする。

この処理モードの選択は、Martinらが指摘するように、感情の情動的意味の解釈いかんによる。そこで、図2のような改訂SACモデルを作成した。

SAC (Situated Strategies of Automatic and Controlled Processing)モデルは、北村(2004a)において提示されたが、状況の影響の仕方や、処理の後に気分の変化が生じる連続的な時間的流れをもったループとして構成すべき改良点があった。これを改訂したのが、改訂SACモデルである。SACモデルは、状況に応じて方略が選択されることを示している。しかし、方略に基づいて実行していると、当然状況自体が変化してくる。それに応じてまた方略が選び直されたり、行為を継続、停止したりする変化が連続的に生じてくる。このような継続的な変化を改訂モデルでは明確に表現できるようにした。以下、モデルに基づくプロセスを描いていく。

改訂SACモデルでは、認知者、行為者の気分(ムード)からスタートし、まず、その気分の情動的意味の解釈が行われる。これによって、課題を面白い限り続けるための手がかりとして自己の気分を取り扱うか、課題をもう十分行ったのでよいのだというようにポジティブ気分を解釈するのか、その解釈の仕方が影響を受ける。

そして、状況の制約によって、Erber & Erber(2001)が指摘するように、その気分は改善したり、クールダウンしたりすべきものであるのか、そのまま維持してよいのか、気分に関わる目標設定がなされ、あるときには、気分維持、あるときは、気分の改善に向けて行動がとられる。気分の改善を重視すれば、それは、感情に対する一種の統制的処理ということになる。楽しい限り課題を行っている際には、自動的な処理モードが続き、楽しさが減退したときに課題を終了する。気分がネガティブの場合、その課題をやめるだけでなく、他に魅力的な、あるいはそれよりは比較的良好な課題や情報が利用可能であるならば、注意をそちらの方に振り向けて、感情の改善を図ることもある(田中, 2004)。

課題を十分行ったかどうかの手がかりとして気分を利用する場合に、ポジティブ気分であれば、自動的処理を行い、比較的すぐに十分として課題を終了してしまう。このとき、感情に関わる目標は通常、ポジティブ気分を維持することにある。しかし、ネガティブ気分であり、状況の制約があれば、ネガティブ気分を改善することを目標とし、統制的処理に入る。気分をポジティブに改善しようとして、ポジティブな情報に注意を向けたり、ポジティブな課題を選択したりして、気分不一致効果をもたらしたりする。あるいは、課題遂行に傾注することで、現在よりも気分状態を改善する。さらに、課題がうまく解決できれば、気分はポジティブに変化し、これによって課題解決は十分という気分を受けて課題を終了する。実際に課題を解決することによっても、単に、気分を改善することによっても課題は終了できる。これは、ストレスに対する課題焦点的対処と、情緒焦点的対処に類似している過程であると言える(Lazarus, 1991)。

ネガティブ気分の多くの場合は、このように統制的処理モードに入り、問題を解決しようとする。問題に取り組むうちに、うまくいく、あるいははまだまだうまくいかないといった状態を気分がシグナルとして表していき、うまくいった場合に、気分が変化する。このようなループが処理モードか

らムードに向かって引かれているループに該当する。

対処を行いながら、気分を参照し、ネガティブ気分が続いている間は、課題に取り組み続け、ポジティブ気分に変化したときが、課題がうまくいったときである。試験の準備の勉強をしながら、もうこの辺で十分だと感じるようなプロセスにあたる。

しかし、対処していても全くとまうまいときもあるだろう。その際には、注意をコントロールし、別のことに注意を向けたりする。好きな音楽を聴いたりなどして感情制御を行い、気分改善を達成してしまうと、プロセスを終了することができる。

これは当該の課題のことを忘れられている限り、ポジティブ気分にあることができるが、課題が重大なものであれば、またすぐに気になり始めることから、ネガティブ気分からすっかり逃避するのは難しい。これを逃避する慢性的な方略として、アルコール依存や疾病への逃避など、自滅的な方略が用いられることもある。しかし、このような方略は、ネガティブ気分を払拭することができないのである。

ただ、問題から一旦距離をとったり、別の視点から眺め直してみたりということによって、ネガティブだった気分を、問題の解釈や自己態度の変化によって、ネガティブでない、あるいはポジティブな気分に変化させることもできる。このような思考のコントロールは、認知行動療法などにおいて扱われている。統制的処理の一環として、課題への態度を変化させたり、課題への注意の仕方を変化させたりする。場合によっては、課題から注意をそらしたり、別の課題へ注意を振り向けたりするのである。

また、情報処理方略を選択するのに、気分だけでなく、課題の特徴も影響するだろう。複雑すぎて徹底的な処理が不可能であれば、簡易的な処理をとらざるを得なくなるだろうし、Fiedler(2001)の指摘するように、既有知識を利用できるような課題の方が自動的な処理をとりやすいかもしれない。きまりきったスクリプトやステレオタイプで対応できるような問題などでは、自動的な処理モードが採られやすいだろう。

また、課題の特徴は、注意のコントロールにも影響する。注意を別のものにそらしやすいかどうかは、課題の構造にもよる。初めから余剰な情報を提示されているような場合では、余剰な情報に注意をそらしやすいことになる。

以上のプロセスの流れについて、継続的なループの働きや課題のストップ、感情の制御などについて、さらに実証的な検討を加え、モデルを検証していくことが今後必要である。



【引用文献】

- Bargh, J.A. 1994 The four horseman of automaticity: Awareness, intention, efficiency, and control in social cognition. In R.S.Wyer & T.K.Srull(Eds.), *Handbook of social cognition*. 2nd ed. Vol 1. Hillsdale, N.J.: Erlbaum. Pp. 1-40.
- Bargh, J.A. 1996 Automaticity in social psychology. In E.T.Higgins & A.W. Kruglanski(Eds.), *Social Psychology: Handbook of basic principles*. N.Y. : Guilford Press. Pp.169-183.
- Barrett, L.F., Ochsner, K.N., & Gross, J.J. 2007 On the Automaticity of Emotion. In J.A.Bargh(Ed.), *Social Psychology and the Unconscious*. New York: Psychology Press. Pp.173-217.
- Bless, H. 2000 The interplay of affect and cognition: The mediating role of general knowledge structures. In J.P.Forgas(Ed.), *Feeling and thinking: The role of affect in social cognition*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.201-222.
- Bless, H. 2001 Mood and the use of general knowledge structures. In L.L.Martin & G.L.Clore (Eds.), *Theories of mood and cognition*. Mahwah, N.J.: Erlbaum. Pp.9-26.
- Bless, H., Bohner, G., Schwarz, N., & Strack, F. 1990 Mood and persuasion: A cognitive response analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 16, 331-345.
- Bless, H., Clore, G.L., Schwarz, N., Golisano, V., Rabe, C., & Wölk, M. 1996 Mood and the use of scripts: Does a happy mood really lead to mindlessness? *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 665-679.
- Bless, H., & Forgas, J.P. eds. 2001 *Message within: The role of subjective experience in social cognition and behavior*. Philadelphia, PA: Psychology Press.
- Bless, H., Mackie, D.M., & Schwarz, N. 1992 Mood effects on attitude judgments: Independent effects of mood before and after message elaboration. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 585-595.
- Bodenhausen, G.V., Kramer, G.P., & Süsser, K. 1994 Happiness and stereotypic thinking in social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 621-632.
- Bower, G.H. 1981 Mood and Memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.
- Bower, G.H. 1991 Mood congruity of social judgments. In J.P.Forgas(Ed.), *Emotion and social judgments*. Oxford: Pergamon Press. Pp.31-53.
- Clark, M.S., & Isen, A.M. 1982 Toward understanding the relationship between feeling states and social behavior. In A.H.Hastorf & A.M.Isen(Eds.), *Cognitive social psychology*. N.Y.: Elsevier. Pp.76-108.
- Clore, G.L., Gasper, K., Garvin, E. 2001 Affect as information. J.P.Forgas(Ed.), *Handbook of affect and social cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp.121-144.
- Clore, G.L., Schwarz, N., & Conway, M. 1994 Affective causes and consequences of social information processing. In R.S.Wyer, Jr. & T.K.Srull(Eds.), *Handbook of social cognition*. 2nd ed. Vol. 1: Basic processes. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.323-417.
- Eich, E., Kihlstrom, J.F., Bower, G.H., Forgas, J.P., & Niedenthal, P.M. eds. 2000 *Cognition and emotion*. New York: Oxford University Press.
- Ellis, A., & Dryden, W. 1987 *The practice of rational-emotive therapy*. New York: Springer. 稲松信雄・滝沢武久・橋口英俊・重久剛・野口京子・本明寛(訳) 1996 *R E B T入門 理性感情行動療法への招待実務教育出版*
- Erber, M.W., & Erber, R. 2001 The role of motivated social cognition in the regulation of affective states. In J.P.Forgas(Ed.), *Handbook of affect and social cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp.275-290.
- Erber, R., & Tesser, A. 1992 Task effort and the regulation of mood: The absorption hypothesis. *Journal of Experimental Social Psychology*, 28, 339-359.

- Erber, R., & Theriault, N. 1994 Sweating to the oldies: The mood-absorbing qualities of exercise. Paper presented at the 66th annual meeting of the Midwestern Psychological Association. Chicago.
- Erber, R., Wegner, D.M., & Theriault, N. 1996 On being cool and collected: Mood regulation in anticipation of social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 757-766.
- Fiedler, K. 2001 Affective states trigger processes of assimilation and accommodation. In L.L. Martin & G.L. Clore (Eds.), *Theories of mood and cognition*. Mahwah, N.J.: Erlbaum. Pp.85-98.
- Fiske, S.T. & Neuberg, S.L. 1990 A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.23. New York: Academic Press. Pp. 1-74.
- Forgas, J.P. 1995 Mood and judgment: The affect infusion model (AIM). *Psychological Bulletin*, 117, 39-66.
- Forgas, J.P. 1998 On being happy and mistaken: Mood effects on the fundamental attribution error. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 318-331.
- Forgas, J.P. ed. 2000 *Feeling and thinking: The role of affect in social cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Forgas, J.P. ed. 2001 *Handbook of affect and social cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Forgas, J.P. ed. 2006 *Affect in social thinking and behavior*. New York: Psychology Press.
- Frijda, N. H. 1988 The laws of emotion. *American Psychologist*, 43, 349-358.
- Isen, A. M. 1987 Positive affect, cognitive processes, and social behavior. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*. Vol.20. N.Y.: Academic Press. Pp.203-253.
- Isen, A.M., Daubman, K.A., & Nowicki, G.P. 1987 Positive affect facilitates creative problem solving. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1122-1131.
- Isen, A.M., Shaker, T.E., Clark, M., & Karp, L. 1978 Affect, accessibility of material in memory, and behavior: A cognitive loop? *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1-12.
- 北村英哉 2002 ムード状態が情報処理方略に及ぼす効果 - ムードの誤帰属と有名さの誤帰属の2課題を用いた自動的処理と統制的処理の検討 - *実験社会心理学研究*, 41, 84-97.
- 北村英哉 2003 *認知と感情* ナカニシヤ出版
- 北村英哉 2004a *認知と感情* 大島尚・北村英哉(編) *認知の社会心理学* 北樹出版 Pp.108-130.
- 北村英哉 2004b *社会的認知と感情・行動・動機づけ* 岡 隆(編) *現代の社会的認知研究* 培風館 Pp.67-84.
- 北村英哉 2005 *思考研究から見た説得過程 - 原論文へのコメント -* *心理学評論*, 48, 21-24.
- 北村英哉・木村晴 2006 *感情研究の新たな意義* 北村英哉・木村晴(編) *感情研究の新展開* ナカニシヤ出版 Pp.3-19.
- 北村英哉・沼崎誠・工藤恵理子 1995 *説得過程におけるムードの効果* *感情心理学研究*, 2, 49-59.
- Lazarus, R.S. 1991 *Emotion and adaptation*. New York: Oxford University Press.
- LeDoux, J. 1996 *The emotional Brain*. New York: Simon & Schuster. 松本元・川村光毅・小幡邦彦・石塚典生・湯浅茂樹(訳) 2003 *エモショナル・ブレイン - 情動の脳科学* 東京大学出版会
- Mackie, D.M., & Worth, L.T. 1989 Processing deficits and the mediation of positive affect in persuasion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 27-40.
- Mackie, D.M., & Worth, L.T. 1991 Feeling good, but not thinking straight: The impact of positive mood on persuasion. In J.P. Forgas (Ed.), *Emotion and social judgments*. New York: Pergamon Press. Pp.201-219.
- Martin, L.L., & Clore, G.L. eds. 2001 *Theories of mood and cognition*. Mahwah, N.J.: Erlbaum.

- Martin, L.L., & Stoner, P. 1996 Mood as input: What we think about how we feel determines how we think. In L.L. Martin & A. Tesser (Eds.), *Striving and feeling: Interactions among goals, affect, and self-regulation*. Mahwah, NJ: Erlbaum. Pp. 279-301.
- Martin, L.L., Ward, D.W., Achee, J.W., & Wyer, R.S. 1993 Mood as input: People have to interpret the motivational implications of their moods. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 317-326.
- 沼崎誠・工藤恵理子・北村英哉 1993 説得情報の統制された処理と自動化された処理とを規定する感情の役割 (1) - ムード状態が分析的思考及び創造的思考に及ぼす効果 - 日本社会心理学会第34回大会発表論文集, 382-383.
- Roseman, I. J. 1984 Cognitive determinants of emotions: A structural theory. In P. Shaver (Ed.), *Review of Personality and Social Psychology*. Vol. 5. Beverly Hills, CA: Sage. pp. 11-36.
- 坂野雄二 1995 認知行動療法 日本評論社
- Schwarz, N. 1990 Feelings as information: Informational and motivational functions of affective states. In E.T. Higgins & R.M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition*, Vol. 2. New York: Guilford Press. Pp. 527-561.
- Schwarz, N., & Clore, G. L. 1983 Mood, misattribution, and judgments of well-being: Informative and directive functions of affective states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 513-523.
- 下山晴彦(編) 2007 認知行動療法 - 理論から実践的活用まで 金剛出版
- Smith, C.A., David, B., & Kirby, L.D. 2006 Emotion-eliciting appraisals of social situations. In J.P. Forgas (Ed.), *Affect in social thinking and behavior*. New York: Psychology Press. Pp. 85-101.
- Smith, C.A., & Kirby, L.D. 2000 Consequences require antecedents: Toward a process model of emotion elicitation. In J.P. Forgas (Ed.), *Feeling and thinking: The role of affect in social cognition*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp. 83-106.
- 高橋雅延 2002 感情の操作方法の現状 高橋雅延・谷口高士(編著) 感情と心理学 - 発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開 北大路書房 Pp. 66-80.
- 田中知恵 2004 関連感情がメッセージの精緻化に及ぼす影響：印刷媒体広告を用いた情報処理方略の検討 社会心理学研究, 20, 1-16.
- 丹野義彦・坂本真士 2001 自分のところからよむ臨床心理学入門 東京大学出版会
- 戸田正直 1992 感情：人を動かしている適応プログラム 東京大学出版会
- Wegener, D.T., & Petty, R.E. 1994 Mood management across affective states: The hedonic contingency hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 1034-1048.
- Wegener, D.T., Petty, R.E., & Smith, S.M. 1995 Positive mood can increase or decrease message scrutiny: The hedonic contingency view of mood and message processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 5-15.
- Winkielman, P., & Cacioppo, J.T. 2006 A social neuroscience perspective on affective influences on social cognition and behavior. In J.P. Forgas (Ed.), *Affect in social thinking and behavior*. New York: Psychology Press. Pp. 41-63.
- Worth, L.T., & Mackie, D.M. 1987 Cognitive mediation of positive affect in persuasion. *Social Cognition*, 5, 76-94.

【Abstract】

## Mood States and Information Processing Strategies(2): The Revision of the SAC Model

Hideya KITAMURA  
Tomoe TANAKA

The researches on affect and cognition are increasing recently. This article discusses the effects of affective states on information processing strategies. Schwarz (1990) proposed that affective states function as a signal about our environment. Positive mood means that the environment is secure and not problematic, so people in a positive mood are likely to engage in heuristic processing. By contrast, negative mood indicates that the environment is problematic, so people have to solve the problem and are likely to engage in systematic processing.

Enormous bodies of empirical researches have shown the difference in thinking style between positive and negative mood states; however, researchers have not agreed on the fundamental process underlying the phenomena.

Bless (2000) gave priority to the dependency on the general knowledge structure, and did not pick up the factors of motivation and cognitive capacity as necessary conditions. Fiedler (2001) proposed the relation of positive or negative mood to the processing styles of assimilation and accommodation.

Martin et al. (1993) showed that the relation of mood states to the information processing strategies can change depending on the situations. They pointed out the importance of the interpretation of the meanings of the mood states.

In this article, a revised SAC model is proposed. This model adopts all influential models, makes the relations clear, and depicts the process of the interaction between the mood states and information processing.

Future empirical researches are expected for the confirmation of the model.

Key words: affect, information processing strategy, automatic processing, controlled processing, mood.